



Title	幼小中大連携による美術教育の試みについて()
Author(s)	中川, 泰; 宮崎, 友理子; 江口, 邦裕; 北村, 真理; 森山, 雄太
Citation	長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 18, pp.19-28; 2019
Issue Date	2019-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10069/39073
Right	

This document is downloaded at: 2019-06-25T16:17:02Z

幼小中大連携による美術教育の試みについて（Ⅲ）

中川 泰（長崎大学教育学部）

宮崎友理子（長崎県美術館）

江口 邦裕（時津町立時津北小学校）

北村 真理（長崎大学教育学部附属小学校）

森山 雄太（長崎大学教育学部附属中学校）

I. はじめに

本研究は、教員養成大学を起点とした幼小中大連携によって、普段の教育活動をより豊かにする活動、普段の教育活動にはない意味ある活動を、美術教育の領域で提供する方策を探るものである。さらに、それらの活動を通じて、将来の教育現場を担うことになる大学生を育てるものである。

本稿の目的は、最近の事例を整理し、長崎大学と長崎県美術館との博学連携の将来的なあり方や、幼稚園・保育所・小学校・中学校に対して貢献できる長崎大学の可能性と課題を考えることにある。

II. プロジェクト「クレヨンの道」について

プロジェクト「クレヨンの道」とは、中学校教育コース・美術専攻の学生と時津北小学校4年生が2017年9月から10月にかけて行った共同制作である。

〔第1段階〕床や壁に貼った紙に児童がクレヨンで自由に線（クレヨンの道）を引いて楽しむ

〔第2段階〕線が引かれた紙を室内にレイアウトし児童が鑑賞する

小学校での実践前に、学生によるワークショップにおいて、第1段階の「自由に線を引く活動」が行われている。活動後の考察には、壁や床に貼られた紙に、児童が意欲的に楽しく活動した様子が書かれていた。クレヨンで線を引くというシンプルな作業なので、説明や指示も児童に理解しやすいであろう。そして、なじみのあるクレヨンでありながら、長い紙に思うままに線を引くことは、なかなかできない体験である。また、クレヨンを用いることで低学年から高学年まで容易に取り組めるなど、題材として優れていることが感じられた。

「線を引く活動」の反省として、「すでに引いてある他の児童が描いた線を塗り

つぶすように引いた線があった」、また、「単調な活動が続き、少し退屈に感じた児童もいた」と記述されていた。この2点を考慮しながら、どのようにして4年生の授業に取り入れるかを考えた。

(1) 授業の構想

この実践を構想した時、関連するカリキュラムは次のようになっていた。

【図工のカリキュラム】

『題材名「ほると出てくる不思議な花」表現（2）絵に表す活動（版画）』

2学期の4年生の図工は、版画からのスタートである。初めは、彫っていない版木にいろいろな色のインクをつけて、刷りの楽しさを味わう。次に、版木に表したいものを彫り、前時に刷った紙に版を刷り重ねる。彫ったところにいろいろな色が表れ、彫る楽しさ、色を重ねるおもしろさを感じることができる活動となっている。

【総合学習のカリキュラム】

『単元名「大学ってどんなところ」』

10月の単元であり、時津北小学校4年生児童は長崎大学訪問を行う。大学内の施設を見学したり、様々な講義を体験したりすることを通して、将来の夢や大学生活について考えていく内容である。

そこで、図工・総合学習のカリキュラムを進める中で、どのように「クレヨンの道」を位置づけるかを考えた。

絵画とちがう版画の特性として、容易に作品を複数枚制作できる点が挙げられる。しかし、通常の図工の授業においては、その特性をなかなか生かしきれない現状がある。3年生までに児童は紙版画を体験してきているが、紙版の耐久性の点などから複数枚の作品を印刷することは難しい。また、高学年の木版画で、彫り進み版画に取り組みと、時間的な制限から完成する作品は1つになってしまう。1版多色版画も同様であるし、単色木版画においては彫る作業に多くの時間がかかり、複数枚印刷することが難しい。

カリキュラムの「ほると出てくる不思議な花」では、彫る前に板にインクをつけて3枚ほど紙を準備し、作品をつくることが例示されている。5・6年生では難しい複数枚の作品制作を行い、その違いも含めて鑑賞する活動を4年生で体験することは重要である。

すると、学習終了後に、1人3、4枚の作品が手元に残る。それを生かし、みんなの作品をつなげて長い、帯状の紙をつくることを考えた。

そうやってできた共同作品の長い紙にクレヨンの道を描き、長崎大学美術・技術教室1階ギャラリーの爽創館で展示してもらおう。児童は、大学訪問の際に、その展示された自分たちの作品を鑑賞できる。

そこで、図工・総合学習の内容を横断的に組みなおし、次のような学習計画を立てた。

- ①版画を印刷用紙やインク色を変えながら複数枚印刷する
- ②印刷した作品を長くつなぐ
- ③つないだものにクレヨンで「道」を引いていく
- ④完成した「クレヨンの道」を爽創館に展示してもらう
- ⑤大学訪問で鑑賞する

(2) 授業の概要

①版画を印刷用紙やインク色を変えながら複数枚印刷する

「彫らない木版としての刷り活動」として、赤や青、緑など複数の色のインクをローラーで板につけ、紙に色を写した。板に色をつけ、それを紙に写すだけであつたが、子どもたちは「きれい!」「おもしろい!」と、楽しそうに作業し、色がついた紙を見ていた。この他に、マーブリングで模様をつくり、同じように紙に写して準備した。マーブリングの作品としても楽しんで作業していた。こうして、一人2、3枚の印刷用紙が出来上がった。

その後、板を彫り進めていった。4年1組は題材を「夏休みの思い出を彫ろう」とした。マーブリングの紙から発想し、夏休みに見た「花火」や「海水浴」など、楽しかった出来事を線で描き彫り進めていった。2組は題材を「不思議な花」として、自由に様々な花を彫っていった。

彫り終わると、刷りである。準備していた色やマーブリングの模様が入った紙の他に、真っ白の紙にも印刷した。印刷する色も黒の他に、赤・青・緑を準備し、刷っていった。児童は、板にローラーでインクをつける作業やバレンでこする作業を楽しんだ。そして、紙をめくった時に現れる、完成した版画作品を見てうれしそうであつた。

完成したのは1人4、5枚である。同じ板から生まれた作品でありながら、背景の色、印刷の色が異なる作品である。鑑賞後に書いた感想には、「マーブリングと組み合わせたらきれいになったので、またやりたいです」「インクの色をどう生かせるかを考えました。例えば、はじめに紙に刷った色があまり暗くなかったら青っぽい」「真っ白の紙に印刷するよりとてもきれいだったし、赤のインクとよく合いました」などと書かれていた。用紙に刷られた色やマーブリングの模様と刷る際のインクの色をイメージしながら取り組んだ様子や、同じ板から生まれながら色によって印象が違ってくると感じていることがうかがえた。

②印刷した作品を長くつなぐ

複数できた作品を鑑賞した後、1枚は個人作品として保存するとともに、残りの作品をみんなでつなげた。

先に述べたワークショップでの反省には、「単調な活動が続き、少し退屈に感じた児童もいた」ということであつたが、真っ白な紙ではなく、様々な版画がつながった長い紙になるので、クレヨンでそこに線を引くときも意欲が持続すると考えた。

同じ児童の作品が続かないように組み合わせるとともに、作品の向きも意図的に変えてつなげることを指示した。

廊下で作業し、30メートルほどつないだ作品の帯が4本出来上がった。

③つないだものにクレヨンで「道」を引いていく

クレヨンで道を引く前には、「すでに引いてある他の児童が描いた線を塗りつぶさない」ことと、「人物の顔があるときは、その上に線を引かない」ことに気をつけるよう指示した。これは学生によるワークショップの反省を生かしたものである。お互いが引いた線を尊重し合うことは大切である。また、今回は友達の写真作品に線を引くので、特に「顔」については、線で横切ることがないように指示した。

児童の振り返りには、次のようなことが書かれていた。

○線を引いたことについて

「すごい長さだったし、やったことのない絵を一筆でかいたから、おもしろかった」

「いろいろな色でカラフルになっておもしろかった」

「クレヨンが楽しくさんぼしている様子を思い浮かべてかいた」

○作品とのかかわりについて

「どうすればきれいになるのかなあと思いながらさんぼした」

「顔は通らないように気をつけながらさんぼしました」

「マーブリングのところは、その色にそってさんぼしました」

「いろいろな作品を見ながらさんぼしました」

クレヨンで線を引いていくというシンプルな活動であるが、自分たちの版画作品がつながった用紙に線を引くという、初めての体験を楽しんでいた。作品中の人物や花など作者が彫り表しているものの形や、インクの色やマーブリングなどの色にも反応しながら線を引いていた。つまり、作品を見て、それに反応しながらクレヨンの線を引いていったことがわかる。

④完成した「クレヨンの道」を爽創館に展示してもらう

学生によって爽創館に時津北小4年生の「クレヨンの道」が展示された。

展示について、学生のレポートには「壁に貼ったり天井から吊るしたりしたいと考えた。上から斜めに、紙を垂らして、子どもたちがくぐれる場所も作りたいたと考えた。しかし、外からも良く見えるように視界を遮るものはできるだけつくりたくないようにしようということになった」と記述されていた。

学生同士で話し合い、協力して作業を進めている。壁に斜めに貼ったり、天井から吊るしたりして、堅苦しい雰囲気にならないようにしていた。さらに、床にも伸ばしたり、画用紙で作った花や葉も作品の間に設置しながら、作品を貼る部分と貼らない部分のバランスに気を付けて、位置を固定したり調節したりしていた。ギャラリーの外から全体のバランスを見ながら、設営を進めていった。

つまり、児童一人ひとりの作品を大切にしながらも、「クレヨンの道」として一

つの作品として展示していることがうかがえる。

⑤大学訪問で鑑賞する

総合学習での大学訪問の際、到着後に音楽棟へ向かう途中、児童の目に飛び込んできたのが、爽創館に展示された「クレヨンの道」であった。

児童がクレヨンで線を引いた時には、廊下に一直線に伸びた姿であったのが、美術棟の1室に広がった世界に驚いていた。後で展示室内にも入って、中からも外からも鑑賞した。大学訪問後の感想には、次のように書かれていた。

○外から見て

「天井につるしてあったり、かべにはってあったり、床にぐにゃぐにゃに置いてあったりして、すごいデザインでした」

「みんなが、うわ～といいました。ぼくも声を出すぐらいびっくりしました」

○室内に入って見て

「ぼくのはどこにあるのか、さがしました」

「芸術のへやにはいったみたい」

「本当にクレヨンの道を歩いているみたいで、きれいでした」

「私が思っていたかざりのしかたとちがって、びっくりしました」

作品一枚一枚を見ながらも、部屋全体を「クレヨンの道」という一つの作品と見て見ることがわかる。側面がガラス張りという部屋の特性を生かした展示であり、こういった鑑賞のしかたは、児童にとってあまり体験のないことである。

(3) 総括

版画は個人の作品でありながら、つなげることで一つの共同作品となる。さらにそこに「クレヨンの道」を描くことで、共同制作の作品としての完成度がさらに高まった。

また、学校では児童の絵画作品などを教室や廊下に展示するが、その際は一人ひとりの作品を個別に展示することがほとんどである。それを今回のように「クレヨンの道」として展示することで、版画1枚1枚を鑑賞しながらも、全体を大きな1つの作品ととらえることもできた。児童の感想からも、爽創館に展示された作品全体を、一つのインスタレーション作品のように感じて鑑賞していることがわかる。

児童は、教師が説明しなくても一つの作品としてとらえる感性を持っているので、学校で様々な作品を展示する際も、掲示板だけでなく、階段、廊下、図書室など、場所や設置の仕方を工夫して世界を広げることができそうである。

版画制作から始めて、「クレヨンの道」を描き、爽創館での鑑賞まで行った今回の実践は、児童にとって貴重な体験となった。

Ⅲ. 全学モジュール科目「教育と文化Ⅱ（芸術）」での試みについて

中川が担当する全学モジュール科目「教育と文化Ⅱ（芸術）」で2018年4月13日（金）と20日（金）の3・4限、2回（4コマ分）に渡って長崎県美術館の協力を受けた。1回目は長崎大学で長崎県美術館の活動の紹介とワークショップ「かたちの服をつくろう」、2回目は長崎県美術館で「スクールプログラム体験」である。

ワークショップ「かたちの服をつくろう」は、2017年10月21日（土）・22日（日）、長崎県美術館で教育普及・生涯学習事業にてドイツ・ベルリンを拠点に活躍するTHERIACA（テリアカ）のファッションデザイナー・濱田明日香によって実践されたワークショップが雛形になっている。濱田は自由で面白い形の服づくりを得意とするファッションデザイナーであり、自著の『かたちの服』の内容をベースに、丸や三角、四角といったシンプルな形の不織布から服をつくるワークショップを企画・運営した。服づくりの基礎となる「パターン」について知るとともに、装飾・デザインの楽しさを味わうことができ、親子で楽しみながら行うことができる。2日間で約400人が参加し、高い評価を得たワークショップを大学の授業で再現させるため、濱田から許可を受け、宮崎に教育実践を依頼した。

【1回目】

時間	内容
12:50～	長崎県美術館の概要、美術館のイメージって？
13:00～	美術館、教育普及のしごと
13:20～	2017年10月実施「かたちの服をつくろう」の事例紹介
13:30～	実際につくってみましょう！ワークショップ・イントロダクション
13:40～	制作スタート 不織布の色を選ぶ ※赤、青、黒の3色の中から選択 各々制作（不織布を切る→パーツや材料を選ぶ→デコレーションする） ・不織布の端切れもアレンジ可 ・ベースのかたちはあり、実験しながら制作する
14:20～	休憩 10分
14:30～	制作のつづき、片づけ
15:00～	鑑賞会、記念撮影
15:15～	シルクスクリーンの下絵を制作（4/20 午後実施の分）
15:50～	まとめの時間
16:00	終了

○ワークショップの材料・道具

はさみ、ステープラー、不織布（赤・青・黒）、リボン、キラキラのテープ、両面テープ、持ち帰り用の袋

○会場設営・装飾

どのような形から、どのようなシルエットの服ができるのか伝わりやすいよう服のサンプルを広げたもの（展開サンプル）と、ハンガーに掛けたものを壁に掲示した。また、壁面のサンプルを実際に型として使えるようにした。

○1回目の総括

ワークショップ「かたちの服をつくろう」は、長崎県美術館で主にファミリー層を対象に実施した内容を展開したものであったことから、大学生からどのような反応があるか半ば心配していたものの、独創的な作品がたくさん完成していた。多文化社会学部、工学部や水産学部の学生など様々な学部の学生が受講していたが、それぞれに自分のバックグラウンドや興味・関心からデザインの着想を得ていたところが特に印象的であった。

服をはじめ、既製の品がどれだけでも安く手に入る昨今、日常の暮らしの中で使うものを「自らつくってみよう」という気持ちに少しでもなってくれたらと思う。また、この授業をきっかけに、長崎県美術館の活動や展示に興味や関心を持ってもらえたら嬉しい。

【2回目】

実際に長崎県美術館に足を運び「スクールプログラム」に参加した。表現プログラムでは前週に描いた絵から作った版を使い「シルクスクリーン」の技法でトートバッグを製作し、鑑賞プログラムではコレクション展でおしゃべり鑑賞会を楽しんだ。また、ミュージアムツアー及びバックヤードツアーでは、隈研吾がデザインした建築を味わうとともにミュージアムの機能や役割を学んだ。

13：10～	エントランスロビーに集合
13：20～	表現プログラム「シルクスクリーン」に挑戦
14：20～	鑑賞プログラム、コレクション展でおしゃべり鑑賞会、バックヤードツアー
16：00～	解散

○シルクスクリーンのバッグ作りワークショップ

私たちの暮らしの中で身近な印刷技法であるシルクスクリーンに挑戦するワークショップ。第1回目の授業で描いた絵をシルクスクリーンの版にし、デザインに合う好きな色を1色選び、無地のトートバッグに印刷した。

○鑑賞プログラム

メトロポリタンミュージアムが提唱した VTS（ビジュアル・シンキング・ストラテジーズ）の手法で、おしゃべりしながら絵画作品を中心に鑑賞した。

作品鑑賞というと難しそうというイメージがあるかもしれないが、答えが一つではない芸術の世界。自分が思ったこと、気づいたことなど、自由に意見を交わす中で、多様な気づきや考え方が共有され、それぞれに鑑賞が深まっていくのが感じられた。

○VTS の流れ

- 1) 「この絵の中でいったい何が起きているのだろうか」
- 2) 「それはどこを見て、そう思ったのか。どこからそう思ったのか」
- 3) 「そのほかに何か気づいたことはあるか」

○2回目の総括

長崎県美術館は2005年4月の開館以来、教育普及・生涯学習事業に特に力を入れており、毎年多数の学校団体が利用している。まだまだ敷居が高いと思われがちな美術館という場所をもっと身近なものとして捉えてもらいたいという願いをもっている。芸術の世界は答えが一つではない。すなわち、鑑賞者の感性に全面的に委ねられるところが面白いところである。様々な美術作品を自分の目で実際に見て、自分の心で感動し、自分の頭で考える。イメージを豊かに膨らませ、知的な創造の楽しみを味わう行為を通して、芸術を人生のパートナーのように捉えるようになってもらいたい。

今回の大学生を対象とするスクールプログラムの体験が、学生一人ひとりの記憶に少しでも残り、また長崎県美術館や他のミュージアムへ足を運ぶきっかけになってくれたらと思う。

IV. 長崎大学と長崎県美術館との新しい博学連携を求めて

今年で長崎大学と長崎県美術館との博学連携は14年目に入った。1年余り前2017年12月の“共同ワークショップ”には附属小学校の北村と附属中学校の森山に学生指導を依頼した。二人はこれまでに学生として博学連携を経験してきている。

(1) ワークショップの内容

- 画用紙を使ってクリスマスリースをつくるワークショップ。
- 制作手順が書かれた説明用紙をみながら、画用紙を3回折り丸型になるように切れ込みを入れていく。リースの形になるようにデザインを自分で考えながら切っていく。いろいろな画用紙を選んで、3パターンの丸型の画用紙をつくる。切れ込みを入れた画用紙を開き、画用紙同士を重ねて、リボンで束ね完成。
- 学生は、客の対応を行う。作品の説明、つくり方の手順を一から教えていく。一緒に寄り添いながら関わり、一つの作品をつくる手助けをして、作品を共に作り上げるワークショップとなった。

(2) 学生と附属教員との関わり

○附属教員は、自分自身が学生の頃に美術館でワークショップの運営を経験してきた。学生の頃の経験として、美術館側と共に企画を考え、どのように準備を進めていくか、当日はどのように運営し客と関わるかを美術館の職員と話し合い実施してきた経験があるため、その博学連携の経験を基に今回の学生と関わっている。

○ワークショップ当日のみの参加となったため、主に学生の運営の様子を見守り助言した。

○助言内容

- ・客に対して積極的に声をかけられず、テーブルの周りを回っているだけの学生には「自分からお客さんに話しかけて、話しながら手助けしてあげてください」や「お客さんがいらっしゃったら、“笑顔でこちらにどうぞ”などと話しかけて、入りやすい空間・活動しやすい空間をつくってあげてください」と助言した。
- ・ワークショップの終了時間になっても客はかえらず会場にいる状態であったが、学生が大胆に片付け始めたので「まだ、お客さんがいるので、わからないように片付けをしましょう。大胆に片付けると、“早く帰ってください”と捉えてしまって、お客さんはいい気持ちはしないと思うよ」と助言した。
- ・何度もワークショップを経験してきた北村は道具の片づけ方も把握できていたため、片付けの手順や方法を美術館の職員と共に学生へ指示した。

(3) 附属教員が美術館ワークショップに参加する意義

今回ワークショップを運営する学生にとって、現場やワークショップの経験がある教員に助言をもらえる環境になっており、とても良いと思った。学生は助言をもらえることで安心して運営ができるようになる。また、美術館側もワークショップの経験がある附属教員がワークショップに参加することによって、説明しなければならない説明が少なく済み、負担が軽減できたと考えられる。また、附属教員もワークショップに再び参加できたことで、美術館が行ってきた準備や学生が行った準備をみて刺激を受けると共にワークショップ内容を学校へ持ち帰り児童や生徒に対して実践できるものになった。今回の博学連携は美術館や学生、附属教員それぞれにメリットがあるワークショップとなった。

(4) 附属教員が学生時代に長崎県美術館との関わりで心に残っていること、学んだこと

- ・連休に行われたワークショップで、初日に来ていただいたお客様が最終日に友達を連れて再び訪れてくれて感動した。

- ・「おもちゃ作りが楽しくて、家でいっぱい遊んだからまた来ました」という言葉が嬉しかった。
- ・コンサートの運営のお手伝いをしていたときに、自分の靴の足音を演者の方に注意された（自分では全く気づきもしなかった音に、本物を作り出す真剣さとプロの意識に触れた瞬間であった）。
- ・ボランティアの方と「長崎くんち」関連ワークショップで山車を作った。定年を迎えていたボランティアの方が多く、様々な職種を経験された方がその技術を合わせながら一緒に試行錯誤したことと、私たち若者と快く活動して下さった経験は今でも心に残っている。
- ・アルバイト生もお客様にとっては一人のスタッフであることを学んだ（接客の対応はもちろん、各ワークショップでの技術や知識の習得、服装や身だしなみなどを館や展覧会、ワークショップのイメージを損なわないでたちとすることなど）。
- ・広報活動にも参加させてもらい、客層のターゲットに合わせた広報活動を体験することで、文化の発信源としても美術館の可能性を学んだ。
- ・子どもたちにとって美術館は、普段の生活している空間と異なる特別な場所であり、そこで出会う本物の作品は子どもたちの価値観に大きな影響を与えることを学んだ。
- ・学生でも美術の魅力が伝えられることとその責任を学んだ。一方で、その心持ちのおかげで笑顔や感謝の言葉をいただけたことが喜びとなった。
- ・学生同士の関わりを学んだ。先輩が運営に携わるワークショップに参加したことが、美術館の学生ワークショップに関わったきっかけであった。正直、活動内容より先輩からの指導のほうを鮮明に覚えている。しかし、そこがワークショップに関わる人間として、子どもと接する心構えの原点であり、後輩たちにも先輩として伝えてきたように思う。学年が進む毎に学生同士の関わりは深くなり、そこには大きな価値があったと感じている。

(5) まとめ

教育現場が長崎県美術館を活用するには「鑑賞と表現が一体化したプログラム作成」「展覧会毎の鑑賞レポートの常設化」「中学校であれば、美術部のワークショップの参加と中学生スタッフとしての活動をモデル化」がポイントになる。大学はそれらを支援する手立てを提案する必要がある。

これまで多くの学生が長崎県美術館の職員に融通を利かせてもらうことで、大学生として主体的であることの大切さを学んできた。自分なりのワークショップへの譲れない思いや、参加してくれる子どものことを考慮したアイデアをもった。与えられた役割をこなすだけでなく、自分がワークショップを企画・準備・運営する立場として、より良いものにするための発想と情念をもって参加することで、学生が獲得できる学びは何倍にも価値あるものとなる。